日本作業療法士協会　海外研修助成制度
実績報告書

学 会 名：WFOT Congress 2026
演 題 名：Impact of Physical modalities on Function and Pain in Patients with Distal Radius Fractures: A Systematic Review
会　　期：2026 年 2 月 9 日～12 日
開 催 地：バンコク、タイ
申請者
氏　　名：金子　隆生
所　　属：山形県立中央病院
会員番号：40207
所属士会：山形県

1.　発表演題の概要

遠位橈骨骨折（Distal Radius Fracture; DRF）は上肢骨折の中でも頻度が高く、とくに高齢者で多い。治療後も腫脹、疼痛、関節可動域制限、巧緻動作や日常生活活動（ADL）の制限が残存しやすく、復職・家事復帰の遅れにつながる。急性期は固定や疼痛管理が中心となる一方、疼痛に伴う不安や恐怖回避によって運動が進みにくいこともあり、リハビリテーションでは安全な段階的運動に加え、症状軽減を狙った物理療法の併用が臨床で広く用いられている。しかし、物理療法の種類・適用時期・用量は施設や療法士によりばらつきが大きく、標準化されたプロトコルや、機能・疼痛に対する有効性の整理が十分ではない。

本研究は、DRF リハビリテーションにおける物理療法（熱・冷却、低周波刺激、振動、パルス電磁場〔PEMF〕、TENS 等）の効果を、無作為化比較試験（RCT）を対象として系統的に要約し、機能改善および疼痛軽減への影響を明らかにすることを目的とした。PRISMA に準拠して系統的レビューを実施し、プロトコルは PROSPERO に登録した（CRD42024585552）。対象は成人 DRF とし、介入は手外科リハ（ハンドセラピー）に物理療法を追加したもの、または物理療法単独を含めた。比較は標準的ハンドセラピー単独とし、アウトカムは機能、疼痛、ADL、QOL などの患者報告アウトカムを含めた。PubMed、EMBASE、CINAHL、Cochrane CENTRAL の 4 データベースを、2024 年 6 月 26 日まで検索した。

検索の結果、データベースから 4,224 件を同定し、2,202 件をタイトル・抄録でスクリーニング、26 件を全文評価したのち、最終的に 10 件の RCT を採択した。介入は圧迫（手袋、間欠的空気圧迫、静脈・浮腫ポンプ等）、PEMF デバイス（ギプス下または術後）、TENS、レーザー鍼、CPM、腱振動を用いた錯覚運動感覚など多様であり、評価項目は疼痛、浮腫、可動域、PRWE、COPM、骨癒合（CT/X 線）、SF-12 などであった。総合すると、PEMF は骨癒合促進や早

期の ADL 復帰に寄与する可能性が示唆され、TENS は術後疼痛の軽減に有用である可能性があった。一方で、対象・介入時期・用量・併用療法・アウトカムが不均一で、サンプルサイズも小さい試験が多く、効果推定の精度には限界がある。さらに QOL や長期の参加（生活の広がり）に関する評価は少なく、短期の症状・機能改善が患者中心の価値（QOL 向上）にどの程度結びつくかは不明である。以上より、DRF に対する補助的物理療法は短期的な疼痛・浮腫・可動域・治癒指標の改善に有望な可能性があるが、臨床推奨の強化には、介入の標準化と長期・QOL アウトカムを含む質の高い試験の蓄積が必要である。

2. 学会参加と発表の印象

タイ・バンコクの BITEC（Bangkok International Trade and Exhibition Centre）で開催され、テーマは “Inspiring Change, Innovating Futures.” と掲げられていた。 公式サイトでも強調されているように、本大会は世界各国の作業療法士、教育者、研究者、学生が集い、臨床・教育・研究・政策を横断して知見を共有する場であった。対面開催により、現場の温度感や地域固有の課題を直接言葉で交換できる点が大きな価値であり、オンラインでは得がたい偶発的な出会い（廊下や展示ブースでの会話、同テーマの発表者同士の即席ディスカッション）が、学びと今後の連携の起点になった。プログラム面では、教育者向けの Education Day や Student Forum 等、学会本体に加えて周辺イベントが設計されており、参加者層に応じた学びの導線が用意されていた。私自身は、臨床実践に直結するテーマを中心に聴講しつつ、国・地域により制度、文化、資源が異なる中で「作業療法として何を守り、何を変えていくか」という共通課題が、各セッションで多面的に議論されていることを実感した。特に、限られた医療資源下での実装、地域包括ケアの仕組み、アウトカム評価の標準化、テクノロジー活用と倫理など、“Innovating Futures” を支える論点が具体的に提示され、単なる新規性の追求ではなく、現場で再現可能な形に落とし込む姿勢が随所に見られたと感じた。

発表については、ポスター形式で自身の研究内容を提示し、参加者から直接フィードバックを得られたことが最も大きな成果である。口頭発表に比べて双方向性が高く、「どのアウトカムを優先すべきか」「臨床での適用条件（時期・用量・対象者特性）をどう整理するか」「各国の標準治療との差分をどう説明するか」といった、実装を意識した質問が多かった。これらのコメントは、研究の限界や今後の検討課題を明確化するだけでなく、論文化・次研究設計（アウトカム選定、追跡期間、サブグループの考え方）に直結する示唆となった。

3. 文献

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）